

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520347

研究課題名(和文)ドイツ語圏の芸術誌の研究 『パン』、『ヴェル・サクルム』、『ユーゲント』を中心に

研究課題名(英文) German art magazines at the turn of the century

研究代表者

西川 智之(Nishikawa, Tomoyuki)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：20218134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：『ヴェル・サクルム』と『パン』の創刊号に見られるinternationalとnationalという相反する二面性からは、芸術誌が当時の社会の産業化と密接につながっていたことが明らかとなった。また、『ヴェル・サクルム』のさらなる分析からは、他の雑誌にはない機関誌としての機能も明らかになった。『ユーゲント』については、編集者のゲオルク・ヒルトのコンセプトの考察や『ユーゲント』に見られる女性像やジャポニスムなどの分析を通し、大衆誌的な特色が強いと言われている『ユーゲント』も、当時の最新の芸術の流れを反映していることが検証された。

研究成果の概要(英文)：Comparison of the first issues of “Pan” and “Ver Sacrum” made it clear that the art journals contained conflicting “international/national” characteristics and that they reflected the relation between arts and the industrialized society of that time. Analysis also established how “Ver Sacrum” was able to function effectively as an organ of the Vienna Secession, propagating its idea of a new art. Concerning “Jugend”, we have studied the editorial policy of Georg Hirt and analysed its illustrations, relating these to the images of females and Japonism and demonstrating that “Jugend” also reflected the fin de siecle art movement.

研究分野：世紀転換期ドイツ語圏の文化・文学・芸術

キーワード：独文学 芸術誌 世紀転換期 ユーゲント・シュティール 総合芸術 ウィーン、ミュンヘン

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者である西川、そして研究分担者である古田は、科研費に拠る過去の研究において、他の研究者と協力し、19世紀から20世紀初頭の欧米の文化・芸術・文学の規範の崩壊と新しい文化・芸術の生成の動きを、「境界の消失と再生」という観点から、多面的な研究を行った。本研究は、それを引き継ぎ、研究対象を世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌に絞り、その誌面の具体的な分析を通して、当時の文化現象の特徴を探ろうとしたものである。

芸術誌に関しては、従来、イギリス、フランス、ドイツなどで創刊された代表的なものを網羅的に比較・研究したものはあったが、個々の芸術誌を具体的な観点から考察した研究は、少なかった。

本研究は、ドイツ語圏の芸術誌の中でも、『パン』、『ヴェル・サクム』という、いわゆる芸術誌の「芸術性」の側面が強い雑誌と、『ユーゲント』という「大衆性」の側面が強い雑誌を、二人の研究者が、それぞれの観点から検討を加える事で、これまでの研究で欠けていた、個別の芸術誌について深く考察しようとしたものである。

## 2. 研究の目的

1890年代からドイツ語圏では芸術誌の創刊が相次いだ。そこには芸術の「純粋性・自律性」と「商業性・大衆性」という全く異なる性格が同居していた。

本研究では、西川が「純粋性・自律性」の性格が強い『ヴェル・サクム』や『パン』を中心に、古田が「商業性・大衆性」の傾向が強い『ユーゲント』を中心に、掲載された図像やテキスト部分だけでなく、広告なども含め、当時の産業やファッション、装飾文化などの広いコンテキストで芸術誌を考察しようと考えた。また他の研究者との研究会やシンポジウムを行うなどして、上記以外の芸

術誌についても様々な観点から研究成果を提供してもらうことで、当時の文化・芸術運動の多様性とその全体像を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

初年度の平成24年度には、研究対象となる芸術誌の基礎的な分析を行うとともに、4年間の研究スケジュールの大きな枠組を考え、その準備を進めた。研究3年目にあたる平成26年度に行うシンポジウムを研究の柱に据え、そのためにドイツより招聘するベルリンブレヘン美術館前館長のインゲボルク・ベッカー氏や国内の研究者とも連絡を取り合いながら、シンポジウムのテーマなどについて検討を重ねた。

平成25年度には、担当する芸術誌について、各自が独自の観点から研究をつづける一方で、3名の研究者に加わってもらい、日本独文学会秋季研究発表会において、「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相—その多様性の根底にあるものは何か」というタイトルでシンポジウムを行い、当時の芸術運動の多様性について、様々な視点から検討を加えた。また、ベルリン、プラハ、ウィーンに行き、世紀転換期のドイツ語圏の芸術運動についての資料収集を行うとともに、翌年度に招聘するベッカー氏とも会い、シンポジウムについて詳しい打ち合わせを行った。

平成26年度には、他の研究者と研究会を行ったり、講演会を行うことで、世紀転換期の芸術誌研究の視野を広げるとともに、シンポジウムや日本独文学会の研究叢書で自分たちの研究成果を公表した。ドイツから招聘したベッカー氏のヴァン・ド・ヴェルドを中心としたユーゲント・シュティールについての講演からは、当時のヨーロッパの芸術の全体像を知ることができた。また、他の研究者にも加わってもらって豊田市美術館で行ったシンポジウム「世紀転換期ドイツ語圏の芸

術誌の諸相 アート（芸術／技）の坩堝 - 世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相」では、当時のベルリンの芸術傾向や日本へのドイツ語圏の芸術誌の影響などを知ることができ、自分たちの研究にも有益なものであった。

平成 27 年度には、前年度に行ったシンポジウムの成果なども加えながら、本研究の取りまとめを行った。

#### 4. 研究成果

西川は、新聞記事や『ヴェル・サクルム』を手がかりに、ウィーン分離派成立過程を分析し、ウィーン分離派がマスコミなどを利用しながら自分たちの理念を過激な形で主張する一方で、分離派館の建設を慎重に進めるなど、周到な準備を行っていたことも明らかにした。これについては、平成 24 年に独文学会東海支部の冬季研究発表会で口頭発表するとともに、翌年度に論文として発表した。

古田は、平成 24 年度は、『ユーゲント』のジャンルをカテゴリー分けして分析を行い、編集者のゲオルク・ヒルトのコンセプトと時代のニーズとが『ユーゲント』の中でどのように表現されているか、具体的に分析を進めた。

平成 25 年度には、日本独文学会秋季研究発表会において、西川が他の研究者とともに、「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相—その多様性の根底にあるものは何か」というタイトルでシンポジウムを行った。このシンポジウムの成果は、翌平成 26 年に日本独文学会研究叢書 103 巻『世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸相』として出版した。この叢書には、西川の「1900 年 - 『ヴェル・サクルム』の転換点」と、古田の「ゲオルク・ヒルトと『ユーゲント』」も掲載されている。西川は『ヴェル・サクルム』と『パン』の創刊号に見られる international と national という相反する二面性に着目し、これを手がかりに芸術誌が当時の社会の産業化と密接につなが

っていたことを明らかにするとともに、1900 年をウィーン分離派が international になった転換点として位置づけた。古田は、『ユーゲント』の初代の編集者であったゲオルク・ヒルトの芸術観や交友関係から、雑誌『ユーゲント』の芸術性の原点を探った。

古田はさらに論文「ジャポニズムとユーゲント」では、掲載されたイラストの分析から、『ユーゲント』におけるジャポニズムを論じ、ジャポニズムは『ユーゲント』の一部に過ぎず、創刊後 10 年を経る頃には、その影響が薄れていったことを指摘した。

西川は、4 年間の研究のまとめとして、2016 年刊行予定の『西洋近代の都市と芸術 第 4 巻 ウィーン：総合芸術に宿る夢』（池田祐子編）に「機関誌『Ver Sacrum』とウィーン分離派を巡る言説」を書いた。クリムトの大学天井画などを批判するカール・クラウスの『ファッケル』の文章なども取り上げながら、刊行されていた 6 年間の『ヴェル・サクルム』の誌面の具体的な分析を行った。

この 4 年間の研究では、『ヴェル・サクルム』と『ユーゲント』については、ある程度の成果を残すことができたと思っているが、残念ながら、『パン』については、研究がそれほど進められなかった。また、平成 26 年度に行ったシンポジウムについては、当初はその成果を論文集として出版するつもりだったが、それは実現できなかった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

古田香織, 「ジャポニズムとユーゲント」, 『言語文化論集』IIIVI 巻(111 - 121 頁), 2014 年, 査読無し

西川智之, 「分離派結成前後のウィーン美

術界の状況について」, 『ドイツ文学研究』  
(日本独文学会東海支部) 第 45 号 (頁:  
17-28), 2013 年, 査読あり

[学会発表](計 3 件)

西川智之, 池田祐子, 高橋麻帆, 井戸田  
総一郎, 古田香織, インゲボルク・ベッカ  
ー, 「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸  
相シンポジウム アート(芸術/技)の増  
嶋 - 世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸  
相」, 豊田市美術館, 愛知県豊田市, 2014  
年 8 月 2 日

西川智之, 池田祐子, 高橋麻帆, 千田ま  
や, 「世紀転換期ドイツ語圏の芸術誌の諸  
相—その多様性の根底にあるものは何か」,  
日本独文学会秋季研究発表会, 北海道大学,  
札幌市, 2013 年 9 月 29 日

西川智之, 「分離派成立前後のウィーン美  
術界の状況について」, 日本独文学会東海  
支部冬季研究発表会, 中京大学名古屋キ  
ャンパス, 名古屋市, 2012 年 12 月 1 日

[図書](計 2 件)

池田祐子編, 西川智之他, 『西洋近代の都  
市と芸術 第 4 巻 ウィーン: 総合芸術  
に宿る夢』, 2016 年 (刊行予定)

西川智之, 池田祐子, 高橋麻帆, 千田ま  
や, 古田香織 『世紀転換期ドイツ語圏の芸  
術誌の諸相』, 日本独文学会研究叢書 103  
巻, 2014 年

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等 特に無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西川 智之 (NISHIKAWA, Tomoyuki)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授  
研究者番号: 20218134

(2) 研究分担者

古田 香織 (FURUTA, Kaori)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号: 20242795

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: